

## 心理療法における「同調」の質の検討

今 西 徹

### I. はじめに

心理療法には様々な考え方や技法があるけれども、そこでなされている仕事には何らかの共通性があり、普遍的な要素のようなものがあると考えすることは、心理療法の根本を考える上では必要なことであろう。そこで、あらゆる、もしくはたいていの心理療法の場に共通することは何か、常にそこで生じていることは何かと問うてみると、クライアントもセラピストもそれぞれ一個の身体としてその場に居合わせ、存在しているということがまずあげられるであろう。そして、身体として場をともにする両者が互いに与えあう影響の重要なひとつに、「同調」ということがあると思われる。

同調は、人と人との間に日常的に生じている現象であり、我々は常に他者や世界と同調しながら生きているとも言える。つまり、同調は特に心理療法の場においてのみ生じているわけではない。では、心理療法の場における同調と、日常生活におけるそれとはどう異なるのか。

心理療法において、セラピストはクライアントのことを理解しなければならない。その理解の仕方は様々にあるかもしれないけれども、このことはあらゆる学派や技法において共通することであろう。そして、その理解の基礎、土台となるのが同調であると考え。いわゆる共感や理解以前の、この身体的現象に目を向けることは、共感や理解ということ捉え直し、心理療法の根本を考えることにもつながるであろう。そして、この同調のありようが、心理療法の仕事がどのようなものになるかを決めているとも言えるのではないか。

「同調」という言葉には、安易にその場の空気に流されてしまう、主体性を持たずに相手に合わせてしまうといった否定的な意味も含まれている。心理療法においても、たとえばセラピストはクライアントに安易に同調してはならないというふうに、あまりよい意味で使われないこともある。心理療法の場において、同調が生じるのはほとんど当然のことであり、それをい

かに意識し、その質を高めるかが重要となると言える。

同調は呼吸と同じく、自律的、無意識的な現象である一方で、意識的、意図的になすことも可能な行為である。これは自然現象であると同時に、技術ともなりうる。ここに心理療法の仕事の質を高めるうえでセラピストがなすことを考える手がかりがあるのではないだろうか。おそらく、心理療法におけるセラピストの同調の質ということは、その心理療法の展開を決づける重要な要素であろう。

ところで、「共鳴」や「共振」、「感応」という言葉も、同調とほぼ同じ現象を指しているが、少しずつニュアンスが異なるように思われる。まず「共鳴」および「共振」は、物理現象を示す用語でもあり、クライアントとセラピストを俯瞰する視点に立ち、場全体で生じていることを表現しているようなイメージを持っている。セラピストの技術やなすべき仕事ということを考える場合、主にセラピストの視点に立って現象を捉えることが適切であると考え、その意味では同調という言葉がよいように思われる。また「感応」は、少し意味が限定されるように感じられるのと、感じて応じると書くように、最初に生じた現象の反応としての意味があり、時間的なずれを含んでいるように思われる。一方で、同調の場合は刺激に対する反応ということを超えて、同時的、共時的に起こるということを含んでいて、本論文で捉えたい現象あるいは行為を示すのに適当であると考え。

本論文は、心理療法におけるセラピストの同調について、その質ということについて検討し、考察を深めることを目的とする。そこで、市川（1975、1984）の身体論における「同調」についての考察を出発点とする。特に同型的同調と応答的同調の区別、同調の抽象度によるレベルの区別を参考にしたい。これらは、同調の質ということを考える手がかりを与えてくれると思われる。

そこからさらに、村瀬（1983）の世界の多元性についての考察を取り入れる。村瀬（1983）は「理解のおくれる子」、いわゆる発達障害の子どもとの関わりを

土台に、「理解のおくれ」を思想的に問い、「理解のおくれと私自身が根本のところでのどのように重なっているのか明らかにする」ことを試みている。そこには必然的に「理解とは何か」を根本から問い直す作業が含まれる。同調ということも、うっかりすると、いわゆる大人の視点から、理解がおくれていることを前提として捉えてしまいがちである。身体的反応に子どもも大人もないようにも思えるが、実はそうではなく、これも我々の成長の過程で学習され、文化的・社会的影響を受けている。そうしたことを取り外したところから同調を考え、世界や身体のありようを捉えなければ、心理療法を考える際には十分ではない。このような捉え方は、たとえば様々な心理療法の場面で発達障害的特徴を持つ大人のクライアントと出会う機会が増えている（河合、2013）と言われる現代において、ますます重要となってくるものと思われる。

以上のようなことをふまえ、本論文では心理療法における同調の質ということについて検討を試みたい。

## Ⅱ. 同型的同調

市川（1975）は、同調について、「他者の身の統合との関係に起こる一種の感応ないし共振」であり、「他者の身のはたらきとの間に起こる感応的な同一化」であると説明している。そして、これは実質的に他者に同一化してしまうことではなく、身のはたらきの図式が構造的に類似するということであると言う。

同調の例として、市川（1975、1984）はボクシングを観戦するときに観衆がひいきのボクサーの動きを無意識のうちになぞるという場면을挙げている。このとき観衆は、表面的には身体を動かしてはなくても、相応する筋肉の緊張によって、ひそかにボクサーの動きに感応し、同調しているのである。これは対象の動きを少し遅れてなぞる模倣というよりは、対象の志向に感応し、対象の動作を先取りしており、予期的な同調と言える。このような同調を市川は応答的同調と区別して、同型的同調と呼んでいる。

また、市川は、同調が顕在化するか否かということから、顕在的同調と潜在的な同調を区別している。すなわち、顕在的同調は、所作の一部や最初だけであっても、実際にその動作を行うことであり、潜在的な同調というのは表に現れなくても内面的に同調が行われてい

るということである。

さらに、同調は構造的なアナロジーによる同調であって、必ずしも完全に合致することを意味するわけではない。市川（1975）は、生後11カ月の子どもの例を挙げている。すなわち、大人が目を閉閉すると子どもは、まず自分の両手をゆっくり組織的に閉閉し、次に自分の口を閉閉する。大人の所作と子どもの所作は、使われた器官は全く異なっているけれども、二つの間には構造的なアナロジーがある。このような現象を市川（1975）は「移調」と呼んでいる。

この顕在的か潜在的かの区別や移調の概念から、同調は必ずしも目に見える形で生じるものではなく、同じ動作が行われるわけでもないことがわかる。そうすると、何をもって同調というのか判断するのは難しいとも言えるが、このように同調の幅を広げて考えることは重要なことと思う。同調のあり方には無限の可能性があり、その微細な違いは、生のありよう、人間関係のありようを方向づけていくのではないか。そしてここに、心理療法における技術としての同調のありようを探る手がかりもあると考える。それは必ずしも目に見えるわかりやすい動きばかりではなく、むしろ目に見えない微細な調整のようなことが重要となるであろう。

ここで、調整と述べたように、同調は、無意識的に、自律的に生じていることもある一方で、主体的な行為としての側面もあると考えられる。というのも対象の動きを入力すると同時に、同じ動きを、何らかの形に変換するにせよ、出力している。このことが、「他者あるいは物の内面的理解を可能にし、世界をその表面にそってではなく、その深さにそって理解させる」（市川、1975）ことにつながるものと考えられる。

同調は日常的に生じていることであると言えるが、その深さや質には相当に幅があるものと考えられる。ボクシング観戦の例でも、試合に熱中してボクサーの動きに入り込んでいる場合と、テレビで片手間に観戦しているなど、あまり熱心に見ているのではない場合では、同調の深さに相当な差があると思われる。

では、心理療法のセラピストにとって必要な同調とは、どのようなものであろうか。ボクシング観戦の例で言えば、より熱中して入り込んでいるような同調が生じればよいのであろうか。これには慎重な検討を要するであろう。そこで、同調という現象あるいは行為

について十分に考察を深めていくが必要になる。

### Ⅲ. 応答的同調

ここで、市川の考えをもう少し紹介したい。

市川（1975、1984）は、同調を同型的同調と応答的同調に分けており、先述のものは同型的同調と呼んでいる。市川（1975）によると、同型的同調が完全に内面化されると応答的（相補的あるいは役割的という呼び方もされている）な同調が可能となる。相手の行動や仕草や表情に同型的に感応し、同調するばかりではなく、それらに応えるという仕方と同調することとなる。

ボクシング観戦の例で言えば、最初はひいきのボクサーの動きに同型的に同調しているだけであるが、同調が深まるとやがて敵のボクサーの動作をなぞりつつ、それに応える形で応答的に同調し、ひいきのボクサーの動作を先取りする。ひいきのボクサーに対する同型的同調と、相手ボクサーに対する応答的な同調が絶え間なく交替し、入り交い、あるいは一致しているという状況が生じ、同調は深まっていくこととなる。

市川（1975）は、顕在的な応答的同調は、潜在的な同型的同調を前提としており、それと円環をなすことによりより深い同調に達する可能性を秘めていると述べている。心理療法において、このような深い同調に達することはひとつの目標と言えよう。セラピストの応答は、クライアントに対する潜在的な同型的同調を前提とした応答的同調の顕れであるべきであり、それによってさらに深い同調が可能となっていく。「他者の演奏、他者の言葉、他者の行為は、私の演奏、私の言葉、私の行為によって完成され、またその逆でもある」と、対話や合奏を例にして市川（1975）が述べているような状態は、まさに心理療法において目指されるべきことでもあると考えられる。

心理療法において、セラピストはクライアントの語りや表現に入り込むだけでなく、「今ここ」において適切に対応することが求められる。その対応が応答的同調の結果としてなされるならば、それはひとつの理想とも言えよう。しかし、このような応答的同調はどのようにして可能となるのであろうか。

### Ⅳ. 身体が多層性

合奏の例で考えると、同調はもちろん他者の演奏に対して起こっていると言えるが、応答的同調が可能となるためには、他者の演奏に対する同型的同調を越えたことが生じる必要がある。それは「今ここ」で演奏されている音楽の世界と一体となり、そこに生成したいわば「大きな身体」ともいうべき、新たに誕生したひとつの構造体の一部となり、そのようなものとして行為するというようなことではないだろうか。

ところで、心理療法の場ということを考えると、クライアントが言葉によって語る場面がまず想像されるが、言うまでもなく、クライアントの表現は言葉による語りとそのすべてではない。絵画や箱庭といったものを媒介とする表現が、たとえば例としてあげられるが、そういうことにとどまらず、クライアントは一個の身体として、全体として表現している、あるいは存在していると言える。

そうすると、心理療法の場においてセラピストに生じる同調とはどのようなものとなるだろうか。クライアントが語れば、その意味内容を追うことは当然であるが、語っているその口調、身体の姿勢や動きなど、様々なものをセラピストは受け取る。さらに、セラピストには様々な思考やイメージ、身体感覚といったものが生じるかもしれないが、これもやはり同調として捉えられるかもしれない。

また、心理療法の「今ここ」でセラピストに生じることは、純粋に「今ここ」でのみ起こっていることとは言えないかもしれない。たとえば、そこに至るまでにクライアントについて知りえたことや、考えた内容によって、「今ここ」でのセラピストの体験はまったく異なったものとなりうるだろう。

このように、同調は細やかに見ると非常に入り組んだ複雑な現象であり、そこで起こっていることを言語化することは本来大変な困難を伴う。そこで、市川（1984）のように、同調を抽象度の違いによって区別するというのは、整理の仕方のひとつとして有用であろう。市川（1984）は、同調を具体的レベルから抽象的レベルまで、感覚・運動レベル、イメージ・レベル、観念レベル（言語レベル）の三つに区別している。これはそのまま、身体というものを多層的に捉えているということを示していると考えられる。

ところで市川（1984）は、抽象度の高い観念レベルでの同調を「観念レベルで同調するにすぎなくなる」と表現しているように、いわば浅い同調として捉え、具体的レベルになるほど同調が深くなると考えているようにうかがわれる。ボクシング観戦の例で考えると、このような捉え方は適切であろうが、心理療法について考える場合には、必ずしもそのようには言えない場合もあると思われる。たとえば、クライアントの、まさにこれしかないという言葉に出会ったときのセラピストの感動は、上の区別で言えば、観念レベルの同調と呼べるかもしれないが、これを浅い同調と考えることはできないだろう。あるいは、面接中にクライアントに激しくののしられ、セラピストが激高してしまったといった場合を想像すれば、これは感覚・運動レベルの同調とは言えても、深い同調とは言えないのではないか。

たとえば観念レベル、言語レベルについて考えてみても、単純に捉えることはできないことがわかる。言葉というものは、身体と深く結びつき、その深みから生じてきて、また身体に直接に影響を与えるような言葉から、竹内（2001）が「壮麗な空中楼阁」、「感覚と切り離された人工言語を含む構築物」と呼ぶような身体から完全に「離陸」してしまった言語体系の一部としての言葉まで、様々にレベルが異なる。また、意味ということに強く縛られ、厳密性が重要となる言葉から、無意味、ナンセンスに近い言葉まで、これもまた様々なレベルを想定できる。

結局のところ、三つにレベルを区別するだけでは、心理療法の場で生じる現象を捉えるにはシンプルに過ぎると言えよう。しかし、市川の区別の仕方は同調の多層性を大雑把に把握するには有用であるし、同調、さらには身体を多層的に捉えるというアイデア自体が、非常に重要であると考えられる。

## V. 身体の多元性

身体を多層的に捉えるのみならず、多元的に捉えるということも有効かもしれない。我々は常に身体、そして世界を体験しているけれども、普段そのことが意識されることはそれほど多くないのではないか。我々は身体や世界をそのまま体験するのではなく、いわゆる日常生活、社会生活といった他者と共有しうる世界

を構築し、その論理に従って絶えず世界を組み換え秩序づけながら、体験し、感じ、考えている。それは、先天的にそうであったわけではなく、経験を積み重ね、発達を積み重ねたいわば学習の成果とも言えるあり方であろう。

それでは、そのような学習がなされる以前は、世界はどのように体験されていたのであろうか。村瀬（1983）は、子どもは「見聞き感じるひとつひとつの世界を、まさにひとつひとつ別々な世界としてうけとめ、その中で生きることができている」と述べている。

道端にすわり込み、小さなゴザをしいて、葉っぱや砂をつみあげ遊んでいる子どもたちは、そこがその時の子どもの世界のすべてになっている。まさにそれが全部なのである。その時の道端を歩いている人や車などは全く別な世界であり、しいて関係づけられることはない。まさにそこはひとつの鳥宇宙になっている。そこが飽きて空き地の探検に出かける時は、またそれだけが子どもたちの現実味のある世界になり、さっきの路地のままごとの世界とは何の連続性もなくその空き地が探検されるのである。体験は常に新しいものである。さっきしたことでも、またのちにする時は新しい現実として体験されるのである（村瀬、1983）。

このような風景を実際に目にすることは現代日本においてはほとんどなくなったのかもしれないが、そのことはおいておいても、人の世界の体験の仕方、理解の仕方は本来このようにその都度のものであり、「今ここ」に展開される世界がすべてであり、その世界と別の時に展開される世界は互いに別々の、独立した世界と言える。それを我々は長ずるにしたがって、地続きの一貫した世界として認識し、そのように体験するようになっていくのである。

村瀬（1983）は、多元の世界それぞれを「界」と呼び、我々の知る世界はこうした界の「あつまり」であるとしている。「私」にとっての世界は、常に界のあつまりとして体験されている。そうして、界と界を地続きのものとしてつないでいくことが、人の世界に対する理解を深め、その人にとっての世界の範囲を広げることになる。また、それぞれの界には基本的に「地平」と「天と地」がある（村瀬、1983）。はじめは地平が境界として分立しておらず、天・地・地平は一体化しているが、それが次第に分化するにいたり、そのような界が世界の最も原型的な形となる。

身体の体験のされ方もこれとまったく同じように多

元的であると考えてよいだろう。身体を多層的に捉え、通常想定される意味での内と外の境界を越えた、世界と一体となった大きな身体ということをも構想する場合、我々が世界を体験するということは、それはそのまま身体を体験することと言える。したがって、身体をこのような多元的な世界あるいは界の集合体として捉えてみることは可能であろう。それぞれの界は、身体感覚、運動、イメージ、言葉といったものの混合体であり、どの要素が強いかは様々である。

ところで、身体ということを考える場合に、界のそれぞれに天・地・地平が基本的な要素として備わっているかどうかは検討の余地があるかもしれない。たとえば痛みなど、ある身体感覚が強烈であれば、身体はいわばその一点に集約されてしまい、それが世界のすべてとなる。あるいは逆に、どこまでも拡張していつて、実体を持たない空の広がりのようなものとして、身体が体験されるということもありうる。身体の体験のされ方のありようは無数の可能性があり、何らかの基本要素を定めることは難しいかもしれない。一方で、いかなる場合においても、潜在的に上下といった方向性の軸はあって、天・地・地平はやはり基本的要素としてあるとも考えるかもしれない。しかしいずれにせよ、身体ということも、その都度体験されていることがすべてであり、独立した界を形成する。

そして、その都度の界の構成要素はすべて有機的に結びつき、ひとつの統一体を構成し、全体として存在する。さらに、それらは常に動き続け、変化し続ける。これまで閉じられていた回路がつながったり、逆に切れたり、伸びたり縮んだり、突然に質的にすべてが変容したり、とにかく同じ状態に留まることはない。しかし、それでもなお、すべてがつながった全体としてある。それぞれがそのようにすべてを備えた界の集合体として身体を構想してみたい。

ここで、言葉を中心とした世界に焦点をあててみる。言葉は身体という視点から見た場合、その質は様々であり、一言で言葉を中心に構成された世界といっても、そのありようは無数にある。たとえば、主に小説などの文章で意識されることが多いと思われるが、文章には文体というものがある。

小説家の村上春樹は、『スプートニクの恋人』という小説をめぐるインタビュー（村上、1999）のなかで、「自分の文体を使うと、自分が考えている以上のもの

が出てくる」と述べている。そして、特に『スプートニクの恋人』は「これまで僕が培ってきた文体を、ここで徹底的に検証してみようと思った」と言っているように、自分が納得いくものだけを文体に詰め込み、そのようにしてひとつの文章を書けば次の文章が来る、というような方法をとったという。そもそもこの小説は、出だしのワン・パラグラフのみを何となくスケッチのように書いてそのままにしてあったのだが、1年ほどたってからこの話を書こうと思い立ったというのがその成立のきっかけらしい。

だからあのワン・パラグラフは、最初はなんの物語も含まなかった、ただの言葉だったんです。なぜそんな言葉を書いたかと言うと、そこからなにか面白い世界が広がりそうな感じがしたし、ああいう文章を書いてみたかったから。読んでると、励まされるというか、なにか気持ちが高揚していく響きみたいなものがある（村上、1999）。

一般には書きたい内容があり、それを表現するために言葉が選ばれていくと考えられているが、創作の現場においては逆のこと、すなわち言葉が先にあって内容が姿を現していくということもあると思われる。そして、これは話し言葉、語りについても同様のことが言えるのではないだろうか。もちろん、話し言葉と書き言葉の差異は決して小さくはないと思われるが、話し言葉にもスタイルはあり、それが内容を導くことは大いにありうる。

このことは、観念レベルあるいは言語レベルにおける同調を考える際に非常に重要なことと考える。ひとつの言葉、ひとつながりの言葉からどのような世界が展開されるのか。その言葉のつながり方、世界の展開の仕方こそが、このレベルにおける「身のはたらきの図式」であり、そこに同調できるか否か、その構造を自分のものとして生きることができるといえるか否かが、心理療法におけるセラピストの同調の質を決めるのではないだろうか。

言葉の世界の展開は、言葉から言葉がつながり、産み出されていくという場合だけでなく、ぼんやりとした把握しがたいイメージや感覚を捉える言葉を探すことで創り出されていくという道筋も考えられる。しかし、その場合もクライアントの言葉を聴くために求められるセラピストの態度や同調のありようは変わらないように思う。今の今提示された言葉がどのような世

界を含んでいるか、その充実した空虚とも言える場所に身を置くことができるか否か。できる限り予断を捨ててそこに生じる微かな波動のようなものを感じ取る状態にあるか否か。その際には、クライアントの言葉が表出されてくるスタイルともいべき形式に対するセラピストの感性が重要な役割を果たすのではないか。それがひとつの言葉が含む世界を感じ取る助けとなり、次なる言葉が表現される道筋をとともにすることを可能にするように思われる。

イメージを中心とした世界においても、同様のことが言えると考えられる。イメージというものも、それだけでひとつの界を生成させる。それがどのように分節化し、つながり、展開していくか。その仕方に同調することが重要となる。Jungの分析心理学において、神話や昔話に出てくるイメージが研究されるのも、イメージの内容だけが重要なのではなく、イメージの分節化、展開の仕方を学ぼうとしているのかもしれない。

ところで、現代はイメージということが難しい時代とも言えるかもしれない。ひとつのイメージがゆっくりと動いて姿形を変えていくというよりは、パソコンの画面を切り替えるように次々と脈絡のないイメージが配列されていく。しかし、やはりその提示のされ方、切り替え方、脈絡のなさということもひとつの「身のはたらきの図式」であり、その構造を生きるということも心理療法のセラピストに求められていることのひとつではないだろうか。

五感を中心とした世界においても、同じようなことが考えられる。五感というものは、ただそのままに感じるしかないものであって、学習されたり変化したりするものではないとも思われるが、そうではない。我々は世界や自分自身の身体を感じる時に、いわば編集作業を行い、秩序づけて体験している。

たとえば、犬が吠えている声をどのように文字に表すかについて言語や文化によって異なることは知られているが、実際の聞こえ方もやはり異なっていると考えられるのではないか。また、時計の針の動く音は、本来リズムなどないはずであるが、我々の耳にはなぜか一定の強弱のリズムがあるように聞こえる。さらに、発達障害と呼ばれる人が、周囲の音におびやかされ、悩まされるという事態は、音の取り捨て選択がなされていないことと考えられる。感覚や知覚の編集作業が行われなければ、世界は無秩序なものとなり、平穩無

事に過ごすことも難しくなるのである。

この編集作業の仕方、これに対する同調ということが非常に難しいけれども重要なことと考える。もちろん、本当にそのように感じることは、ほぼ不可能であろう。しかし、市川(1975)の同調の定義も「実質的に他者に同一化してしまうことではなく、身のはたらきの図式が構造的に類似する」ことであり、自動化・無意識化してしまっている自分自身の編集作業を細やかな観察によってできる限り意識化していく訓練を積むことで、このレベルでの同調の質を高める道というものもありうるのではないだろうか。

心理療法における同調とは、「今ここ」で展開されるひとつひとつの世界に入り込み、その世界の構成要素として行為することと言えるかもしれない。それが心理療法における応答的同調なのではないだろうか。そこで、ひとつにこの世界とあの世界は異なるという、区別が重要となると考える。「今ここ」で展開される世界の論理に同調し、そのなかで世界が分節化していくことと歩みをともにするためには、そこに安易に別の世界の論理を持ち込むことを自重しなければならない。このことが非常に困難ではあるが、心理療法の仕事にとって重要なことと考える。

一方で、いわゆる常識的な世界のありよう、日常的な世界というものも重要な足場である。村瀬(1983)は、子どもにとっての多元な世界のひとつとして日常的な世界があり、成長するにしたがって、世界はますます多元な世界として理解される一方で、日常生活世界も一層独立したものとして理解されるに至り、二つの世界は使い分けされ、その間をたくみに「いきき」できるようになると述べている。セラピストはこの子どもが世界を体験していくプロセスを心理療法の毎回の面接においてたどる必要があるのではないか。

心理療法において、クライアントが面接場面以外の日常生活世界を生活しているということは重い事実であり、心理療法のどのような局面においてもこのことをはずすことはできない。クライアントが心理療法の世界と日常生活世界を使い分け、その間をたくみに「いきき」できるよう配慮することはセラピストの重要な仕事と考えられるが、そのためにはまずセラピスト自身の自由な「いきき」が可能になる必要がある。

心理療法のセラピストにとって日常生活世界とは、自分自身の日常生活世界およびクライアントの日常生

活世界についての観念ということになるだろうか。セラピストが自身の日常生活世界に身を置き、そこにしっかりと根をはって生きていることは言うまでもなく重要なことである。また、クライアントの日常生活について想像し、考えることで、できる限りひとつの世界としてはっきりした像をつかんでいくこともまた重要であり、そのことによって逆説的に心理療法において展開される多元的な世界もその独立性を担保されることになるものと思われる。

セラピストにとって多元な世界の重要なもうひとつとして、そのセラピストが依って立つ理論や技法、さらには心理学的な読みや見立てがある。これもやはり独立したひとつの世界と言える。そしてこれは必ずしも観念のみで構成された世界ではなく、このありようによって他のあらゆる世界の体験の仕方が変わってくるようないわば身体化された世界であり、またそうでなくては実際の役には立たないとも言えるだろう。これもまた、セラピストにとっての「日常生活世界」であり、重要な足場と言えるかもしれない。

## VI. 世界の独立性

多元のひとつひとつの世界を同調によって生成すること、そして常識や日常生活世界の論理を安易に持ち込まずにその世界の独立性を担保することは、先にも述べたが、非常に難しいことである。しかし、それがどのくらい可能になるかが、その心理療法の質を決めるともいってよいようにも思われる。ここで、あらためてその困難性について検討するとともに、その可能性について考えてみたい。

ここで、市川 (1975) の同調の概念に戻ると、市川は Minkowski (1953/1954) の *syntonie* (*tunig*) という概念をもとに、元の意味よりは拡張し、一般化した意味で用いていることが注釈において示されている。Minkowski (1953/1954) は、統合失調症 (精神分裂病) 者の環境に対する態度の特徴の根本をなすものとして「同調性」をあげ、躁鬱病者のそれと対比させている。躁鬱病者が環境との接触を失わず、他者の感情を理解し、状況に適應する同調性を持つのに対し、統合失調者はそうした能力を失い、世界と隔絶し、融通のきかない自閉的な状況に陥る。Minkowski はこうした特徴を「分裂性」と呼び、「同調性」と「分裂性」

の軸で統合失調症の根幹にあるものを理解しようとしている。

市川 (1975) はさらに、同調能力が失われた状態と、逆に同調性が極度に高まってしまった状態について、Minkowski を引用しつつ、統合失調症と躁病を例にあげて説明している。

同調の能力が失われる場合には、世界は深さをもたない単なる延長、よそよそしく冷たい芝居の書割のような単なる表面となり、私は世界のいかなる存在とも共感することができなくなる。「切られた、離れた、二つに分かれた、バラバラになった、虫にくわれた、解体した」といった形容は、分裂症に典型的に見られる<同調不能>を示す基礎的表現である。これに対し同調性が極度に高まる場合には、われわれは世界のすべての諸事象とやすみなく共振する。このようなく過同調>の状態では、わずかな構造的類似によって、つぎつぎ移調と新たな同調が誘発され、めまぐるしい感応の連鎖がわれわれの生を支配する。過同調を典型的に示すのは躁病者であるが、躁状態にあっては、「(外界との) 接触は、瞬間瞬間において存在するだけで持続しない」。かれらはあまりにも環境と同調して生きているために、たえずのがれさろうとする自我をとらえることがむずかしい。極度の過同調においては、「病者は病的現象に還元してしまう」のである (市川, 1975)。

ここで、同調という概念をさらに拡張して考えてみたい。環境との接触、世界との共振としての同調について、統合失調症の場合にそれが起こらなくなると考えられているが、一方で、統合失調症の人が世界や周囲の人々から繊細に様々なシグナルをキャッチしていることも、よく知られているところである。たとえば中井 (2001) は、統合失調症の能力面で有利な点として、「かすかな徴候をとらえる鋭敏な予知能力」をあげ、これを乳幼児期に母親の表情をとらえる能力であり、また思春期以後に異性に近づき、パートナーとなるのに必要な能力、相手の気持ちと状況を読み取る能力であるとしている。

また、Bateson (1972/2000) の示したようなダブルバインド状況ということも、通常よりもむしろ鋭敏な同調能力がなければ成立しないことであろう。統合失調症の鋭敏な読み取り能力は、社会化され、多くの人に共有されるに至る以前の徴候を受信するのではないだろうか。それは常識的には勘違い、思いこみ過ぎとも言われることになるだろう。そうした様々の徴候を読み取り、なおかつそれが自身の対処の容量を越える問題をつきつけてくるため、どうにも身動きできない

状況に追い込まれ、その解決方法として環境との接触を断ち、同調不能の状態を選んでいる状態が統合失調症と言えるかもしれない。

一方、躁病における同調とは、やはり社会化され、共有された次元で生じているものと思われる。それゆえに、Minkowski (1953/1954) が言うように、躁病者とは通じ合い、触れあうことができると感じられるのだろう。これは、いわば共同性への同調ともいうべきことで、同調の中でも後天的で、文化的・社会的要素が濃い限定されたものと考えられるのではないだろうか。たとえば、同じ笑顔に対する同調でも、その社会のコミュニケーションにおいて意味が共有された信号という側面が強く、そこに還元されない微妙な表情の次元はむしろ切り捨てられているのではないか。また、中井 (2001) が、躁鬱病の人は俗世間の範囲で生きていて、躁病の誇大妄想にしても鬱病の罪業妄想、微小妄想、心気妄想、貧困妄想にしても、統合失調症の妄想とは異なりその範囲を越えないといったことを述べていることも思い起こされる。

ここで精神病理学的な議論をしたいわけではない。筆者にその力量もないし、的外れなことを述べているかもしれない。ただ、ここで述べたかったことは、共同性への同調には留まらないところまで、心理療法における同調の概念は拡張して考えるべきではないだろうかということである。すなわち、共同体や社会、文化において共有される以前、言語が成立する以前、乳幼児期に母親の表情をとらえる次元にまで、同調の概念は拡張して考えるべきではないか。そうでなければ、心理療法のセラピストにとっては「同調不能」の事態が多発することになるように思われる。

もちろん、同調の概念を拡張したからといって、先述のような次元での同調を行うこと、あるいはそうした同調が生じているのを意識することは、簡単なことではない。それは、自我意識や自己・他者という区別が発生する以前の意識に戻ることを要求するかもしれない。あるいは、西田 (1911) のいう「純粹経験」というのは、このようなことかもしれない。まったく判断や考えを加えず、事実そのままに知ること。未だ主もなく客もない、知識とその対象が全く合一しているような経験。ここから始めて、その都度そこからどのような思考や判断が生じ、世界が分節化していくかを見ていくことこそが心理療法のセラピストに求められる

理想かもしれない。しかし、このような経験の仕方というのは、容易なことではない。

心理療法において、セラピストが意図的にクライエントの姿勢や仕草、口調を真似てみるということというのは、できるだけ先に判断を加えずに、その世界に身を置くことから理解をしていこうとする工夫とも言えるかもしれない。たとえば神田橋 (1984) は、「患者の身になる技法」として、そのようにクライエントの真似を実際に行ってみることや、イメージの中で自分の魂が抜けだしてクライエントの身体と重なることを試みる「離魂融合」など、様々な工夫を提案している。これは、顕在的に具体的な動作として、あるいはイメージのレベルで、同型的同調を意識的に行うことで、予断なく理解することを試みているようにも見える。

一方で、セラピストの依って立つ理論は、いわゆる身になっている状態にあれば、事実をそのままに知る、経験するということをセラピストにさせないかもしれない。理論がセラピストの物事の見方、体験の仕方を規定するところがあるからである。これについてはどう考えればよいのだろうか。

先に述べたように、これもまた独立したひとつの世界と言える。そのことをできる限り意識し、それがどのような世界で、そこにどのような論理が働いているか、対象化して知っておくことが重要ではないかと考える。それは、そこにおいてのみ現実性を持つのである。そうすることで、それとは別の世界とのつながりを見出すことも可能になる。世界を分離することができず、そこに働く論理を混同してしまうときに、様々な歪み、問題が生じてくるように思われる。

先述のように、身体感覚ですら学習されるのであり、文字通り純粋な経験をすることというのは難しいように思う。ただ、そこに近づけるように身体を細やかに見つめていくことは、セラピストが依って立つ理論がより繊細に、柔軟になっていくことでもあるのではないだろうか。

このように世界を分離して、その独立性を担保すると同時に、その世界間を自由に「いきき」できることもセラピストにとって重要なことであろう。そのためには、それぞれの世界どうしがどのようにつながるか、関係づけられるかを読み取るということも必要で、ここにセラピストが依って立つ理論が機能することになると思われる。そして、その筋の読み取り方次第で、



それぞれの世界が地続きにひとつの平面にならされてしまっていて世界の独立性が壊されてしまうことになるか、あるいは各世界のつながり、関係を見出すことで、逆説的にそれぞれの世界の独立性も担保されることになるかが決まるのではなからうか。できる限り世界を細やかに界として分離し、なおかつ界どうしのつながりを見出して結合することによって、界の「あつまり」、集合体としての大きな身体も機能することが可能になっていくものと思われる。これは等身大の文字通りの身体においても事情は同じである。身体の各部位の独立性が担保され、それぞれが自分自身の独立した動きができ、なおかつすべての部位の動きが統合されて機能するとき、その身体はその能力を最大限に発揮していることになると言える。

## Ⅶ. おわりに

心理療法における同調の質について、主にセラピストの視点に立ち、セラピストのなすべき仕事、技術といったことを念頭におきながら検討することを試みた。同調を、目に見える身体の動きに対する同調ということを超えて多層的に捉えること、また、その都度の「今ここ」において独立した世界が展開するものとして多層的に捉えることは、同調の質ということを考える手がかりとなるのではないかと考える。同調ということにおいて生じていることは複雑難解で、言葉にすることは本来無理なことかもしれない。ただ、そこで生じていることを正確に記述するというよりは、心理療法という技法の質を高めるための方向性を探るという意味で、同調について考えていくことは必要なことではないかと思う。

目に見えないもの、実体のないものに対する同調ということは困難で、捉え難いことであるが、そうしたことを想定すること自体に意味があるのではないか。想定しないことを感じ取ることはできない。現代社会は目に見えること、実体がある（ように見える）ことにあまりにこだわり過ぎているようにも思う。そこから離れたところに目を向けることも、心理療法の仕事にとって必要なことではないだろうか。

正確かどうか、確かかどうかということも大切かもしれないけれども、捉え難くとも何らかの現実性をもちうる物語を描くことは心理療法の技術を考えていく

うえでより重要なことに思える。新しい物語を産み出すことと、それがどういう方向に向かっていくのかを検証し、見極めていくことの両方が必要であろう。今回は現実性をもちうるか否かについては不明、さらに検証という点についてはまったくのゼロになってしまったが、今後の課題としたい。

## 文献

- Bateson G (1972): *Steps to an Ecology of Mind*. Chandler Publishing Company. 佐藤良明 (訳) (2000): 精神の生態学 (改訂第2版) 新思想社
- 市川 浩 (1975): 精神としての身体 勁草書房
- 市川 浩 (1984): <身>の構造—身体論を超えて 青土社
- 神田橋條治 (1984): 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社
- 河合俊雄 (2013): 大人の発達障害における分離と発生の心理療法 河合俊雄・田中康裕 (編) (2013): 大人の発達障害の見立てと心理療法 創元社
- Minkowski E (1953): *La Schizophrénie*. Desclée be Brouwer. 村上 仁 (訳) (1954): 精神分裂病みず書房
- 村上春樹 (1999): 『スプートニクの恋人』を中心に  
村上春樹 (2010): 夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです—村上春樹インタビュー集 1997-2009 文藝春秋
- 村瀬 学 (1983): 理解のおくれの本質—子ども論と宇宙論の間で 大和書房
- 中井久夫 (2001): 看護のための精神医学 医学書院
- 西田幾多郎 (1911): 善の研究 弘道館
- 竹内敏晴 (2001): 思想する「からだ」 晶文社

